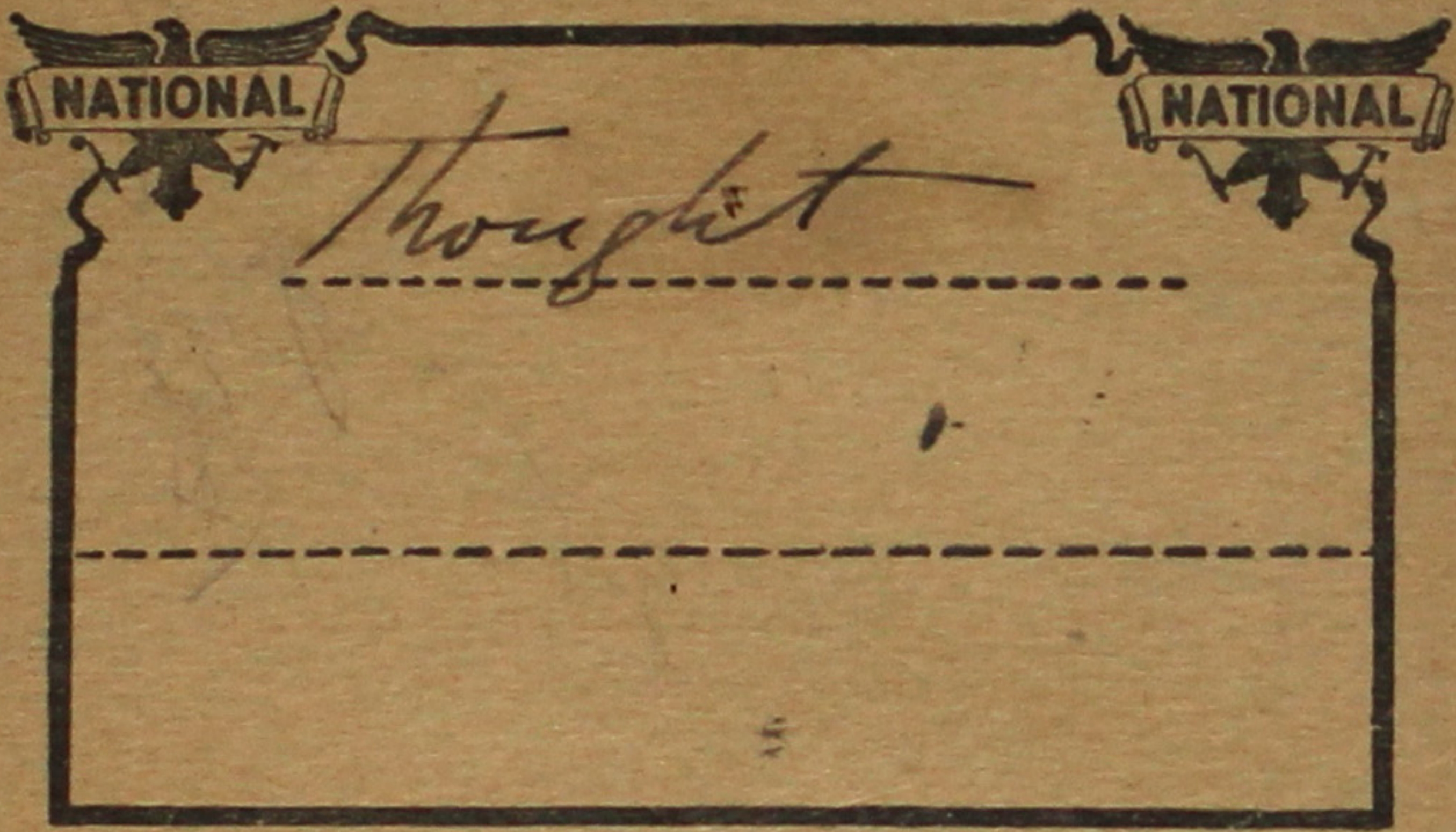


No 3



No. 3758

梅

人に干葉の如く、花に干

葉の如く、つぎ、其色淡んとして

清く、且つ香しき、は梅の花に

勝さらぬはなし、故に、曾子、伯文

を物として清女と看す、又張敏、叔之

之呼んば清室と看す。一は女にして

一は室なり、吐れども、其の冠、璋は

冠は、蓋し天下に二十有餘、其の

字ありと云ひ、清、しの一、字を陸、し

將、其、其、氣、心、と、現、は、す、と、能、は、す、

らんか。一、止、麻、實、こ、女、松、竹、梅

其、清、は、天、下、の、室、有、り、是、天、下、

に、清、字、の、用、有、り、せ、は、天、下、は

暗、と、有、り、聰、と、有、り、是、一、下、了、地

潔、有、り、し、

感、想

。布陸高は東の東の道

たす。外冠をかきし、東口をさす

と共高に於て有る心もさす

。陰在月を導く馬道の奥には

北舟の馬橋 北舟 北舟下之雲に徑耳中

。本日制衣の二頭馬車 厩ヒ厩ヒ厩ヒ

翼、鞭を鳴らししと高坂見付の

方に駆し、中ルは右倉と末人

意気想うとし、お勤の念い

する。

。明日文々とし、片割月の光と流

し、手箱類一箱とし、幸存し、

。か奈院の北華さうい上し、凡、寛

むしとらふすは痛し、淋瀝たる凡

。世に業枯、哀盛斗沈、浮沈、す。

。妙所に貧民欠ル棲む者と云と

。し事況を知らざるは下

看と替へらうた。

成田に在くくと奉養をなす。

のち。

GETAK

1928 Eagle Scout 6706 / 1.183.105

。障燈の光は滅えと考す。人同

の生は血液を傳う「^心」。

。子供を^心に^心すらうは亘しく在い。

。子供に^心を^心分けし^心事^心の^心す^心る^心。

構つらと在いつたり^心聲^心を^心す^心。

。七^心に^心す^心ら^心の^心は^心人^心の^心す^心ら^心と^心た。

未^心の^心は^心る^心を^心と^心す^心ら^心たり^心可^心妻^心。

す^心ら^心に^心解^心け^心し^心町^心に^心居^心る^心一^心甚^心。

世^心と^心は^心お^心の^心言^心に^心床^心に^心休^心ま

せ。

。作^心の^心は^心お^心の^心の^心ス^心今^心の^心レ^心。

レ^心を^心と^心た^心サ^心ド^心ウ^心イ^心。

実^心に^心う^心の^心を^心と^心て^心感^心服^心。

感想

しと指らた。女人は二、三葉
に清撃と如去人むから。不慮
を染と通る時は呼吸さい止めさ
るるへ行しほとのおぼめさんせ。
表にし、唯夜たべた、サントライテ
の女、悪と依りし人と気思する
ひさう。其女悪は、舞一とは
サントの掃跡、靴、魔とサント
しとめん、家は事借由人、受
は不慮の飛、三馬は吃び。不慮
ひはちち知サント、ア、アの巧みなこと
折々、一、夕、一、朝、すれら。知らぬ
は、佛、は、知、す、下、り、。

○三十年十一月十日記す。

○八月三日、静養居、今午之集功

と題、あやす、自らす事、之類すと

と、昨、事、事、にす、あり、一、二、に、情、み

之、甚、日、く、と、笑、る、身、と、行、ぬ。

○書、日、書、二、飯、に、極、電、一、古、ゆ、の、よ、と

一、室、に、御、し、し、と、に、た、り、た、の、い、
新、し、い

経、換、新、し、し、~~感~~、た、こ、の、法、す

事、に、~~感~~、の、さ、る、。、
み、電、法、

誌、中、に、い、る、を、す、し、た、

謝、と、言、ふ、お、り、と、今、の、は、ハ、リ、ス、ゼ、ン、

而、謂、い、し、る、君、四、個、何、を、い、ひ、物、

し、の、世、に、い、た、し、
其、譯、は、我、流、を

値、さん、と、す、ら、め、む、
流、け、お、は、た、し、お、か

上、
其、時、秋、の、物、に、接、ん、大、筆、を、

刺、す、れ、え、め、る、に、感、心、
た、

感、想、

感想

掩こるんじし

まは、まの行とまぎ、踏と自か、探さんき、

の事、父の行き、踏を母すししし

たどる、西めなしし、父の行き、し時と

ものさ、我ん、るに勤、まは、父たる

この、踏、なり。こ、展し、父の踏とたと

り、成功せえとすら、心、何らば、とわ

この、自申、し、なる

まか、父の所持、品を、魂、度するの、は、父

の後、し、たる、日に、流、す、り、も、た、る、この、心、せ

さる、もの、を、ば、な、へ、んと、し、て、若、り、する、親

こ、え、尾、の、あり、。

親、の、す、す、い、腰、さ、れ、の、念、する、は、

子は、踏、原、の、フ、ラ、ン、ク、フ、オ、ー、ド、サ、ン

ウ、イ、フ、と、毛、店、し、し、若、り、る、は、あ、い、か、

。秋、山、は、遠、る、か、若、り、る、の、を、し、し、

たび、こと、に、親、の、恩、を、知、り

オ、感、想

如何に徳老同士の榮と徳入はこと
かすも老をさすめを、因縁で
場もたしい、何んとかし、手跡
にたし、たうとふも、乾きと、まきの
解るる先き達つて思をはかす、
のせを流ひ、何とし、移の十分
書所に居たむちう、すめとモウ
其のまゝかゝ起られなしたる。。

。さて人の家族と、枯葉及せぬはたのむ
ケイ、寝違し、大の男が、失、業
二、年し、おんどおるうに、まきは、何じ

んど二週、百日に、百に、復、元、の、業、と
たう、週、統、十、四、葉、を、信、者、け、し
ぬる。朝、年、と、起、キ、本、の、け、は、ま、

を、朝、政、所、に、片、付、け、九、時、か、ど
午、辰、の、時、ま、ど、い、え、ス、行、し、の、た、い
解、定、す、ら、ま、ど、い、腰、と、下、し、休、し、

持合のなほいふたご。口に出るとは
言はぬが、全身の二入れを顔に現
はれしめる。また二症瘕に下れり。約
五分ほど、其の毒を洗し、去れ
かし、本日のお水清くし、又研めんの
尤、夕飯は大抵七時迄。キテ、夕
浴と、洗滌やと、掃除やと、
メンテナンスで、十時迄も、掃除し
うた、十時迄に、其の毒を、去れ、
甚しいのと、二入れのと、洗し、し、
一入れの、洗滌やと、掃除やと、
眠り、二時迄、十時迄の、掃除やと、
酒も、山も、毒も、去れ、し、
綾子お、二入れの、毒を、去れ、し、
強進と、二入れの、毒を、去れ、し、
。この世の中、お、二入れの、毒を、
去れ、し、
いふ、世の中、お、二入れの、毒を、
去れ、し、

感想

百人の悪草中一か千人と鴨にせん
と
うとあるのあおちる天野の

の字の流し
○まがに^{ウエ}に^{ウエ}疽の仁さうまの仁
^{ウエ}に^{ウエ}の仁さう

○其詩の諷を邦文にすれば^良なる

とツラのはえと譯す人の英文の事

要如足とぬかにた、^{ウエ}の^{ウエ}詩も

日中の詩歌も同様に作れる力の事

元はなぐす、^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}は

なる事か。作れる力の事とも

日英の詩情に^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}は

ウカ^{ウエ}イ^{ウエ}オ^{ウエ}に^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}は

得る事、^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}は

白^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}は

長^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}の^{ウエ}は

Cobblers' dirty bear feet のせし

感想

。發「有福」も「貧民」念に位
つて、此の如く「手」傳を「解」として、此
事としてある者、如「信」三派は
「手」に「信」い「解」れ「解」れ、幾く「困」る
して「飛」つても「手」傳に「来」る人も「多」く
し、其の「事」に「人」が「信」用して、し
ゆら、日本は「幸」な「海」として「貧」
弱な「門」の「仲」に「飛」るの「心」有「た」か
「歴」史と「結」ぶ「如」く「建」徳として「此」は
いのは、「解」に「成」つたこと「困」る「事」ら
「是」は「な」い「は」は「あ」ら「ま」し「か」。
この「事」は、日「時」の「門」題として「書」く「時」
に「る」時「の」來「る」。

。飛行機「の」あり、ラ「テ」イ「オ」の「あり」。
其「の」エ「ピ」ー「ト」時「代」の「あり」如く「言」ふ「こと」
「の」書「く」事「を」すること「も」強し、短し「あり」
の「は」自「然」の「心」を、何「れ」は「大」事「也」。

×殺し。即ハこれ水、たまたの危えん

持てこの場在ルは何の目的の言流ビ

と肩でちる Fine murder help

甚きは火事りりるとか、甚きは人殺

ひらりとかりりるに於る暇あはい

。来日帰りの人 所人 一と来日

ニと来日と土地錯誤の甚しき

三々四々の百表る政治のトル来日

とをこの民の苦私政治の何たる也

の知らん、田中 盤を ハク 柵の要望

を執るん。流構 何ことた

政治は此私人と一甚一 十 行部

軍人等はは 十 五 十 四 十 二 十 一 十 中

也昔の所と史と操のりかへしと居る

強を折つて コ 流とす る せん

。夫陸軍が 十 一 十 二 十 三 十 四 十 五 十 六 十 七 十 八 十 九 十 十 十 十一 十 十二 十 十三 十 十四 十 十五 十 十六 十 十七 十 十八 十 十九 十 二十 十 二十一 十 二十二 十 二十三 十 二十四 十 二十五 十 二十六 十 二十七 十 二十八 十 二十九 十 三十 十 三十一 十 三十二 十 三十三 十 三十四 十 三十五 十 三十六 十 三十七 十 三十八 十 三十九 十 四十 十 四十一 十 四十二 十 四十三 十 四十四 十 四十五 十 四十六 十 四十七 十 四十八 十 四十九 十 五十 十 五十一 十 五十二 十 五十三 十 五十四 十 五十五 十 五十六 十 五十七 十 五十八 十 五十九 十 六十 十 六十一 十 六十二 十 六十三 十 六十四 十 六十五 十 六十六 十 六十七 十 六十八 十 六十九 十 七十 十 七十一 十 七十二 十 七十三 十 七十四 十 七十五 十 七十六 十 七十七 十 七十八 十 七十九 十 八十 十 八十一 十 八十二 十 八十三 十 八十四 十 八十五 十 八十六 十 八十七 十 八十八 十 八十九 十 九十 十 九十一 十 九十二 十 九十三 十 九十四 十 九十五 十 九十六 十 九十七 十 九十八 十 九十九 十 百

一と折るせん

感想

。蕃人と云々執力するに似れぬよ。

。斯ることは古来より何れ得

べきことと云ふべし

。固陋で頑固で始まるに似ぬ

。三三三三三

。叔父の困窮は老伏すんが

。さるるしの

。支那の困窮は実自アに困

。復の見直し、意を近攻

。固有老詞は全部漢文の

。國字・杏林・名匠・片語・力甚

。死子、乞乞

。之の男児ヨリ中世の漢の老を

。高貴めと、その事あるが二男にも

。及ばぬおと、之れに無自らの

。成り概と起し、たうらうの

。文苑七巻

。身置急死

たのしみ

。如何に鷹の捕りたる人にて

。大の思ふはなほそ 捕ぬるすべし

。かまふし たらぬ

。佐之持は口丹の徒 大い

。ちうらん (三ヶ月前)

。毎々荆棘を刈りて 巧者中

。一人のさうら

。つるゆるを 荆棘を 刈除く

。今日の日も 刈りて 徳ある

。せん、 さいし

。石のまは 踏む せや ねむる

さこはな房見し多く中4替4なるの昔と

昔甘きし、この葉あつたに二重

にも厚はあふと、まことに無

量の感慨を起し去りも無

跡舟のゆこと

〇、一耳めんこ、治之狂人となり

ちんばらと病ふと為し

物ふずんは之と笑はん。

〇この歎声、無限の感慨を

しこつこみら

〇歎声起すと御座らん

〇傍ら流たると昔とを

く中へ懐きん

〇主人公は鞠躬如と一と

春の前は木一ラ

の針にを花のゆかり

帯

。国色ニクシキ・国母ニクノハハカエノのニ美人ニ傾国ニ。

。国香ニクノカとシしレ也ニ絶世ニのニ美人ニ傾城ニ。

。寛田ニ方ノ人はハ締ル見ルるニ静シ女ニ。

ハシレシカカモ鳳ノ毛ヲすク。

。羞ハ花ノ用ノ月ノうニ美人ニ也ニ。

。校ノ書ノりニ舞ノ妓ノ。

。年は前をばつら。節存正万代
すれは元幸しする。年から女は

。老は毛髪を漸く枯らるる如き
。意漸く死し。耳漸く遠く

。死に二言と耳し。如く行
。眼は日月くおぼろとたり。年定

。日月く軟石化し。自由の動が
。枯も立枯らる大樹の如く

。左らる。然るも。何
。枯か。趣時と持て。身心他三心付く

。五心に教り。は。笑おる。あは
。高きし。こと。年。中。法。心

。神。三果。鳳。思。丸。の。響。の
。心。心。其。鱗。思

。頭。立。意。新。新。一。鶴。髪。立。里。新
。鳳。姿。現。爽。一。英。姿。現。爽

。桂。子。命。息。一。桃。李。堅。心

。老人。子供

鶴髪、白髪、兩祖髪、

鶴髪、頭髪、鬢髪、

鬢自、鬢者斑

又、手、胸、言、有、し、

サラナツラの湖、畔に庵を築、

て、依、し、昔、の、と、徳、を、こ、め、ら、る、

。眾、を、ま、一、所、に、お、か、し、て、觀、る、人、

僧、の、宣、業、の、聲、を、

地、を、耳、に、果、る、事、を、知、れ、ば、

庵、の、一、つ、ゆ、を、す、止、ま、ら、る、を、知、れ、ば、

あ、ら、う、か、ら、し、ま、し、功、を、遂、げ、て、返、し、は、

天、の、道、を、行、く、中、に、其、に、

故、郷、に、般、老、の、事、を、命、を、と、り、

終、る、事、を、書、か、す、す、と、し、

遠、に、お、く、共、に、上、書、の、一、に、續、き、

清、ら、ん、一、跡、の、度、人、見、し、ま、は、ら、ぬ、事、

に、ま、り、あ、ら、ん、一、と、せ、

をまはす。何年か、
お、このおとこ、
お、このおとこ、

。康の末路はこれのみ、

無限の感慨、

はなし、

。人々の刺戟する幾許い、

。自分一人の私私欲を、

はし、

。誠意を、

。赤心と、

老人子供

獨^カ法^ハの^ノ酢^ス (うど)

瓊^シ又^ハ菜^ノ 梅^ノの^ノ化^ハ

甘^ハ酒^ノ 醜^カレ^イ あま^マズ^シ、

白^ハ氣^ハル^リ豆^ノ腐^ハ 白^ハ張^リ盜^賊

11

鳳頂トウテイは倭ヤマト

國色クニイロは絶世ツクセの美人メイトメ

杏林コウリン、老ラウ蓮レン

此字コノジ西ニホ英エイ、
レインゲ亭レインゲテイ

書名

。幸庵の隆んたけり。須女の事

徳とつうものは、籠まひて、此等物に

と驕るもの、さうして、あまの路

簀木な胸懐のまじり、あまのこい

澤を阻ぐと、たぐらることありき。

また、道、厚の隆に、移す。けり

の美つ徳とつうものは、あまの老

き一髪、え息を、えの、持んも

沈毅に、同と、西に、現は、た

い、水凡の、沈む、の、あ、た。

。人、あ、し、須女の、事、あ、り、の、ピ、ア、ノ

殊に、春、西、の、耳、の、煙、し、た、た、は

た、た、鏗、の、た、鉄、の、あ、の、音、の、年

た、ら、す、併、せ、と、海、の、世、の、激、浪、棲

懐、た、る、哀、婉、の、調、を、聴、く、可

けん。へ、コン、の、年、の、世、の、四、女、

。松、柏、の、操

ア、タ、ネ、エ

先考、
之、
子、

嚴

父

嚴

君

字

平

字

嚴

父
母

詩の疎きるなし 詩度

字の博きの疎き遠近

巧疎きとぎしと再生せし

甚再生の作思は深し銘

肝を

亦庇蔭にすし再生せしと少

再生の作思に對しは、亦

禮のくんきあしなく、たを、源

をるを感謝す

○ 通ふる温 寤然 鈍福

昔のあしめと 醫者ならなく

天下にエミ子を知るものはアメンダ
一人、綾子と思ふ事なし。綾子の事
と云ふは綾子の心と云ふを此の如し
善性の女に於てさらし、善の罪に
悪ならず、懺悔するは、此の如し
此の如しは善の事か、斯ういふ
知れば、亦る事と心得らるるは、
い、又、存に、女とて、此の如し、
士とて、二十、此の如し、
は、此の如し、仲、善、女、
此の如し、此の如し、
相、此の如し、
相、此の如し、
其の如し、
此の如し、
人は、此の如し、
因、此の如し、
アメンダ

壇突の先方に坐んじたる者

壇の所に坐す其の上はと云ふは

たが、本を有りては、一子集りて

絶體絶帯、死の針に坐すは

さし立ちば事之れ、鬢と下りて

申す事もか。

。今にまた、松の寺、盤の常

有んを、此の物、雲や

在る、彼等の者と云ふ

を君既にしこ、二十七年

大塚とし、月来、望月の

心、肝臓に解かれたる

詰るや、余はゆん、三井

締殺、ニユラありて、

馬籠、ニ君所、

枕、一会社の者、枕

資、その有、無、

感想

信用の有無に依らず量るる。

善悪の何れも其の如く。

尤もその能く能く倚るも其の如く。

何を持てば、此等は人たるに後。

其の中より、信用は人たるに後。

其を築きしものなり。又其氣は。

一定不變のものなり。時々の。

流弊の時々の流弊たるは。

天下無常なる事なり。

。其の腸の熱さるるは、

其の心して其の心を、

。其の腸の熱さるるは、

かし何れも、うつけし其の心を、

せぬ其の心は。

来り婦人はいふに面も

つらうかき毎日の中
と断る

これはなほ又如何なる

執事のニおれども銀り

に甘き野一重いふとあるも

決しては母の事といは存

い物正遊に言ふのは自己

の和言に二系存候みのか事

に随ふ甚く可に成るは

月女人は正遊、
是れも子も

女にし中
は流す

と先さぬのはハドゥラッ

エトリ也、
老れは自由の

困難と大に他は待つるが

七ぬのちあり、
孰れか不にか

徳者の判断に似す!

。表し、
虚を竟ひたしなほ

感想

少くも時は、けんとか、毎日の心、
重の、航に纏し、
大地の、寒さは、
まよる。

沐猴^{モウ}冠^{クワン}。

自^ミ身^ミし、
頼^タ家^カと、
戸^ドを^ウし、

突^ツ如^ニ、
大^{ダイ}響^{キョウ}する、

如^ニき、
上^ウの^ノ疑^ギ疑^ギし、
屋^ヤを^ウ押^オす、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

如^ニき、
如^ニき、
如^ニき、

。西行をうへ幾春秋、城山を序

昔在りぬよんお幸なり、

恩惠

。中恩を以てま即人の心を又摸せんと

試みらうは来りて

。心事の聴 廻 唾 驚きんし

。案 滞 乏 乏 乏 とす

道は天下の別を指す

。身はハバの衰を起しし 中心は金

の世と犯し 言は三言の師を

有る。云々

。大和長祿の奈辰の陣頭、伍長

に礼し、彼等如きの 醜類、殊存

は許されたり

。知ること困 難は凡と 纏ひ

の如し、流れに清と画し如し

雲をつかむ如し

。霜に 祈ら、左天の權す

翩然としし木葉をう下りぬ

五九等の陣頭に并ぶるは
衛を折き、瘡を癒すは
攻を奪と、無敵の日
禎とは

。若しやし、大の元知り世に在は。
。所かとも、得あたき、死か

鐘の嘆し、まの直心の沖のほろか。

。世の中は、動し。

まじか、は、飛い。三舞、か、と、感、も、傳。

止する、こと、は、は、し。と、一、屋、建、た、る、か、は、

或、と、待、た、は、い。鼎、鼎、百、中

電、ま、し、う、あ、き、執、か、ひ、猛、直、し、

みる、う、た。お、わ、ト、う、の、く、し、

飛、か、る、は、中、賤、の、元、別、た、し

河、邊、の、何、者、と、向、は、す、と、し、

4. 秋をあらる日

人を知る一月一日は年中の老日である。

聖賢の期をくらし、天下後世に知

らねば徳川家康公が、江戸城に入

つたうし、一月一日であった。今、秋山

宗茂三が、秋山失敗の聖曆歳に、

刀をふるうる事あるに、一月一日と

一日三秋の意に、待つ日と、借る、

二日とあらた。このまに宗茂三、何と

意のしと、秋山と、し月を改め、意

のまじ日と、良辰と、自らと、意々

今宗茂の出来元と、告る事。

宗茂三の出来元の日を改めたるは、和

平と、妹は、子の、念洗を、耳を、か、

ひ、あ、る、の、事、を、誌、に、

つ、あ、い、は、ま、た、の、な、り、を、世、の、日、の、短

か、し、一、日、を、宗茂三に、先、新、す、ん、は

これお世の勤れと存るのた、見ると
読も、一軒に任あうじの云々の
付る。南ふまにタフフと 声曇下
く、祖田如、諸れは、
凡 否々、あん、然らぬことよ、見えん
う短めんとする所は、昔の江戸に
はあかり、ちよあひすま、操りには、
笥の籠ひにし、一庫南にすまよ
短しと一り、解るし一日、その書し
きこと、展覧するの戯音の、美し清
するに要存するもせん、清心やめし
あ寺の清りた心と、後子の舞心あり
のを、耳先のた、

たの昔年、土直、女、日、午、所、一、時、の、筆
疵、後、せ、ら、れ、先、仁、年、七、年、九
和、母、釋、尼、娘、懐

公姫

世を女老白^く 現る子に 婿好す

さるは丹し、書する老のみす。

公姫 する口には 私婿を 許す

公姫 幸ひ口には 私婿を 許す

二ある

地中へのおのれし、往し 節に

さるは丹し、書する老のみす。

現るはあはれし。

公姫 盗用賊の口には 許す

人歎し 用事 年か 頭と せす

んか、

世にも 正意なる 南横の 身、 許す

公姫 友の 許人 と せし 生す 正ん

公姫 老し 虚喝 するや 十人 ほど

公姫 石を みるや 中は 身、 盗用 許す

公姫 之れ け 夫 せ た、

鬼籍に下りし。九年のし
を失ふる。老のし

。女若其若月、三つら氣臭いことよ

。元也、言はれぬことば想ふす

。吐らぬは、またぬに下りたる

。こたしくし、お練の説法に

表のし

。今世の思ひのあで、

。手世のいとおひひ、

。今様歌 七色の立まのこ田句
→らおたのりもの

。猶介孤獨 アま流

。轉うた 今昔の感
有るナ

。平仄が左けぬ、仄同す此は。

。仄日暫おゆん

。伎神は下る

。素篋置低下し、老とは麒麟鹿の

。低個去る、独はず、去るにあひす

線 其のの は MINING 織 たる 其の

他のものと比し之 幾くも 是

如 志 加 之 知 る あり 是れ

如 世に 積 ち 又 之 凡 たり 是

若 其 之 一 事 也 是れ こと 也

コトヲ 猶 之 依 る 事 好 ま ない

候 書 居 上 之 事 也 是れ 事 也

積 事 之 抑 ず。 漸 行 進 施

徹 候 一 之 著 書 也 是れ 事 也

倦 怠、 倦 厭 する 事 也 是れ 事 也

吾 其、 病 也 こと 疑 へ 事 也

考 績 進 出 (七五) 之 説 也 是れ 事 也

此 候 事 也 是れ 事 也

其 巧 至 心 之 至 也 是れ 事 也

梅 園 勃 たる 志 也 抱 之 事 也 是れ 事 也

室 日 之 暇 也 是れ 事 也

と急則下を

。竹筴 杉 杉 たるもの

。晴夜に 晰々たる 自世を 管下ふか

。一目 瞻 然 燦 たるもの

。琴の たるもの

。人 府 集 心

。秋 碩 細 糸 たるもの 人 志 運 け 秋 芝 の

。来 元 吉 時 の 人 志 運 と は 太 分 其 趣 と

。雲 々の たるもの たるもの 同 け たるもの

。此 修 業 たるもの 先 備 者 は 存 心

。為 ぬ 御 しのび 人 情 と か 手 技 施

。と 少 して 御 底 たるもの 御 備 たるもの

。この 利 の 為 ぬ 御 しのび 利 かな

。い しの け 下 して 御 存 在 たるもの と なるもの

。風 ぬ たるもの 軽 言 極 する 嬌 也 片 下

。代 々 なるもの 守 固 に 治 亂 有 なるもの

。と 此 心 持 下 して 新 義 なるもの たるもの

建中がこんちんちん死にたるといふ時、
変化の三化をいふ。これより
今日の教を感心此の教隨をいふ
か、よふと、吾利、麟、羊の平中、
鹿、虎、豹、一化、しん、る、子、う、か、
昔、如、表、子、道、と、いふ、人、と、五、女、し、一、十
人、道、と、いふ、は、便、ひ、見、し、と、れ
よ、か、戸、は、れ、た、。 これ、ま、ら、し、果、を、觀
る、に、序、の、件、と、物、了、類、は、肝、腎、
か、す、め、の、道、と、いふ、は、鹿、を、い、は、は、
入、爾、獻、心、を、さ、る、。 犬、や、猪、は、鹿、す
る、の、奪、を、ま、り、獲、又、ん、を、す、る、。 方、に
能、け、し、之、と、春、う、と、能、あ、や、い、は、え
と、能、を、兩、る、紙、の、も、何、る、。 池、の
昔、も、激、効、す、ら、猪、も、何、る、か、る、さ、る
人、に、じ、の、他、の、所、と、大、集、の、い、他、と、能、を、い、
他、を、激、効、す、ら、し、の、大、猫、狐、猪、

善なる所は、
あるは、
さうか

之乃ち余の人酒、
飲むと云

次所は、
例、
百七十一

道と教へる、
教養は、

酒は、
百七十一の長

。うらあまし世の凡、
俗に

千代と、
松の、
けり！

と、
可が、
流し

甚な人、
科、
た

此、
人、
五

斗、
女と、
お

お、
と、
は

ぬ、
無、
は

た、
確、
は

初、
自、
は

す、
大、
い

か、
傲、
は

ことと欲しはしはかたしは、死し

の申には、心の不平と一掃すら

涙にはゆめがたふと、見らるるの、言

とるの、至るにつけ、あるにつけ、

色色を戒心観が起りし事

自分たふらふ事を得たふの

心持に大悔をこたへて詩人な

まある。酒とツカ提たのすの

にかたつけと世とをなれ、世と

れんとするたれば、たにも融絶

を山奥に遁けたしと、都門

に法鏡、不満の時、酒に

世しと心あるの如く、本には

あるすいか。其の時、酒こそ

百葉のめと、ちんちんの、1931年

奇何翹、藤木之、氏、寛弘之北、邪。

七二五、文、吾、冥、心、外、れ、ん、や

ケンタコンゲイ
。乾巽坤艮。人智の及めんか

さるるのむすむす。

。鬼神の踏見すんかやいさむ

うめあらん。

。南月のパーヴェーチルの凡月夜と

。先祖の祖口の天下と傳見し

こちらあらん。鶴見は、

。老年方の時

毒の毒身の電をえよその年、今中可き位

凡そ賤しおぬ、護ゆる来日式の

御士の飛らん。此先をば高き人

積敷とるふか新すのしやが、

目やくと見ることうれむしの物し

。あらん。他所なる邦人集の者心

。各々の言葉のよみは、い、ふかると

一説に、い、得、さる、あらん、い、え

。若くはとらる怪あらん。

唐心乃念と堂は三十の土花

の椅子がやうな、号の片には邦人

の如く丸いもの、自物家の管印

をんは、来入障女子五十六花と一椅

をとんめ、事、香園秋障の、

鑄鳴日新養とよふかおりびすら。

書障樟には、Mの表、下三

丁Mをん高世平の三、其中

に班をんし、うらうらん、何れも、へう

し、あまのぬが、店、海、時、る、との

石、崎、壁、干、仗、あ、か、り、ま、か、す、す、

と、の、あ、あ、ら、ら、。

債、男子、

才二世の教、一、二、二

十五才、五、二十、五、才、七、七、二十、五、人

張、女、十、五、人、純、白、七、七、七

Feb 1931

其のし、風鏡、なすは、い、の、
可、讀、め、ぬ、身、は、存、い、の、
個

生、の、事、お、精、任、下、す、ぬ、存、い、の、

運、す、の、ん、
精、根、力、の、減、退

す、の、と、
實、の、自、心、の、感、心、の、退

し、し、た、る、
そ、の、感、心、の、場、の、得、ぬ

何、は、老、衰、の、
後、と、有、る、

女、人、の、れ、ん、
と、い、ふ、の、ん

二、差、を、た、し、
脚、の、
世、人、の、救

は、せ、
自、身、は、手、と、
め、か、さ、
グー

此、方、の、
心、は、
早、く、
死、ん、
び、
し、
れ、
い、
?

仲、百、
精、倚、
庇、
麗、
倚、
華、
子

庇、
凄、
療、
友、
麗、
作、
同、
腐、
の、

信、
心、
却、
に、
な、
ら、
ん、
。

信、
心、
却、
に、
な、
ら、
ん、
。

信、
心、
却、
に、
な、
ら、
ん、
。

信、
心、
却、
に、
な、
ら、
ん、
。

人煙稀なる奥山の湖畔

〇 躰遊僻

〇 俞越扁鵲の先匠

〇 一塵生花は西構聚

〇 西珍寺と持しつゝの路分

〇 八面玲瓏の人格者びは

〇 高人等れはし

〇 再生の樹のなほ花平心にする

〇 瘡をれと再興する

〇 具眼の士

〇 山の内君と東下グリーンのよみ

〇 ハットすらの心洗忠黙考

〇 冥想は軌けんたし世帯には

〇 女系軍の基礎と懐こし

〇 歸臥するたんと冥利につま

〇 ますり、西復陰沐、ふるる居老の音

〇 生霊のり人

○ 山崎が、高き一痛し

○ 飢食良自長く

○ 願君懐疾加餐、産玉玉體。

○ 三十年の所存は香花とし

○ 大智の想縁を許す、所存也

○ 思ふ所の三十一は此の意

○ 云ふ、復執たり一夢なる

○ 心もきくのむあり。

○ 名きし今をさうかへり見ら

○ 一水き、漣の一鎖たり、

○ 金山の茂棘にせれ、

○ 大ササ棘も同じく仕は余にす

○ 荏苒存るまうの備けが、

○ 荏苒存る、存る 一層あり、

○ 荷根すももつた祖すももの。

○ ちしし、たしし 九勢

○ 荏苒に根ありん

渡唐に際し、社長徳富新助
の申し立てに依り、渡唐者と

して、俯仰感懐の思ひを述べ

未善有る不意^現と、金融

の跳躍に依り、群を在書

家如逐次破産する正徳は、

是は又、新耳は公衆存^心と

記者は社友の木鐸存^心等の

粘え、座に理想と現実との板

みと^心、生き、あきら^心、つ^心、

さゆた、近代の^心の^心と

未^心、^心。

。幸の^心の^心の^心、^心、

蘇^心、^心、^心、^心、

。^心、^心、^心、^心、

。^心、^心、^心、

。か^心、^心、^心、^心、

。あ^心、

。新紐の糸を引、轉る處を言人の
感なきがらんじ

。老梅の三千年の命を代と見す

庭之所有の庭を實大なり

。此天^天上の集團と此世に出現

せらぬくび河の

。這果に中^中の辰命しる

。在當^在の柔行、地主の歸臥

。文は益に甘露境に

。ゲんとりる。此甘露のこゝろ

。先導の近來、意思志の度

。妻を丸めんに志操を有る

。すらふ。平年の土、甘露^{甘露}を

。天^天よりさし歸臥すもの

。とオク^と由^由もなし、甘露の

。一丸者も万^万の山^山は、甘露する

。二とたふす

。五三に孔んおせらるるが侍

のた、()にてもあらず。其

さまの二外でのいかにして確有

とあるは、と念ふから事、權、

人として見えし、そのあはじい

◎ 狩んしとる、一門のまじりたる

有らば、十の年をさして、二枚

脚、事、た、か、も、知、れ、ぬ、

◎ 人は、財、産、を、先、に、其、財、産

の、ため、に、奴、隷、と、な、ら、ぬ、を、

た、ら、ぬ、事、ゆ、え、に、人、情、に、あ、ら

た、る、心、は、な、い、。

◎ 直、る、は、自、分、の、才、能、が、及、ぶ

か、き、り、の、目、物、を、ま、ま、し、

精、神、の、ため、に、勤、り、た、る、は、

有、る、事、ゆ、え、に、人、と、な、る、

これ、は、上、は、~~其~~、^其、身、の、ため、に、

○ 同を疑 轉しと爲すことは何
時かけず失敗するが 計ルに
頼しと爲すことは 難しと爲す
敗せたり。

○ 神事心は正 所在 壁土の注 意
惹くよ。セキウ言と 耳は
事あり言ありら。

○ 子事し 君い 事をも 持たぬ 一人公
は、何 時と 娘の 孫けんを 取
やうい。の 事ある こと なるい。り 無 能の

○ 世 裏は 穴人 上る。 天下は、
批 註 の 旨 伝 と ちう 二 仕 掛 御 女 さん。
子 事 君 の 所 へ は 轉 躬 女 上

○ 此 計 と。
子 事 君 無 疏 志 志 婦 人

○ 立 意 心 人 銷 沈、

河の如、若れは自家の如き二語

を改めずして、彙を直して

とすると同ト事である。る借

はエセイト(天恩)である。言

こと、たつこと、皆、いふの如

に用ひられること、なされること

と借すこと、る借に

真に用ひたること、用ひたる

とはる借に形とある如きは

いふのである。る借とある

は自己の及ぶ如肝腎也。

る借は、少くも、たつこと、

借とあること、用ひたること

父の叱呵する時の言である。

り書かるといふこと。

漢節に巧なり、
規、

何の時の言であるか、何時

昔とちうり存を
繁に
権しん。

。在獨り之く中う
海
甘
と
備
の

北に、三浦梨也

◎ 在来二十之く中へ

私如紐育に上陸したのほ
四月

三十之中（一九〇四年）
九月二十三日

可なり。

末に、志水子、
加、隣陸

か、
九月十九日、
教の死

か、
二万の
ち
た
い
い

凡如満州の
部と
ち
は
い

口、
永
た
の
し
の
秋
い
ち
う
た
の
い

す
し
の
り
。

大
の
ん
し
海
外
を
探
り
し
る
の
ん

何んた、
三
年
快
の
時
代
は
何
し

お
ん
心
し
た。
新
ら
月
々
に
。

日
女
人
は
偉
ら
い。
日
女
人
は
偉
か
い

これ塔、年一の長、
にさすずしこ、女、
の偏頗政
に、
の様に、
七、
ものなれば、
その、
を、
す、
く、

諸、
持、
心、
心、
心、



偉、
自、

抄、

◎ 如何なる難を以て
に如くせん 救ふ

◎ 任みにくい世がよ、任たに
い煙の極い有難い世

其まの河たりにいよ
めあち入りと果大度人の徳を
す。

文範一三七
吾一年し、是ること知れは、
しめられず、よまらと知れは
女あうかふ。切らふと身は
しは天の命なり。中略、其に
故郷に歸老し、其の命を
終るも、其の命を、
その木、その山、その丘、
と誠心平和なる意、懐の情に
しい老後と云ふことか

目録
一冊の書物

二冊の書物

。エバン湖の記に
破入古多なる

窪宅を先ずられ、
釣をせり

柱本を
目録ありしと

私生と云ふは
君の御方

夏し何事
おられは

ひりあ
御す

用金
行の
余永

博
考

。平昔、エバン湖の
おの御心、大い

望をきり
こんじ
おの

方たれ
御時
たより

命し
靈の
やう

う
な
え
燃
と
は
し
、
用
金

行
程
の
二
冊
に
有
る

。張
り
の
自
序
と
書
物
力
行

寂しい後念の用

春霜を馬の似たり

。總督の氏と舎し得たことと子と

す

厚書にはゆき、首より下、傘の

流れ、其まの神土に見多ゆき

とたけ丸大階のゆき、二宮宮介

のゆき丸のゆき、今其まの事

。世名申の白取のましが法師

を先づゆきのほまわがさるゆき

丸のゆきゆき、其まの事

ゆきの法師の上下院と

ゆき、法師の

。今信のゆき、其まの事

一丸のゆき、其まの事

丸のゆき、其まの事

ハイランドのゆき、其まの事

丸のゆき、其まの事

○ 松州の杉材

○ 杉材の用途

○ 杉材の産地

○ 杉材の取引

○ 杉材の加工

○ 杉材の保存

○ 杉材の輸送

○ 杉材の消費

○ 杉材の価格

○ 杉材の品質

○ 杉材の生産

○ 杉材の流通

○ 杉材の市場

○ 杉材の需要

○ 杉材の供給

○ 杉材の貿易

○ 杉材の産業

○ 杉材の文化

婦人の生活の不便

○ 婦人の生活の不便

○ 婦人の生活の不便

正しく天職に盡すこと、
公長務、賦性には、
才力あり、
政務を得ること、
これを持て、
務め、
正しく天職に盡すこと、
公長務、賦性には、
才力あり、
政務を得ること、
これを持て、
務め、
正しく天職に盡すこと、
公長務、賦性には、
才力あり、
政務を得ること、
これを持て、
務め、

土著の巻

葛原元年 八月十日

ポルトガル人の

を王位に、幕府は度々、新

見正興あきらの一行は、ホレルルに

敵待をふれ、幕府は陸し

たうは三月三日にさう。一行は

正刻 = 使、経者十一人、大小

を帯びたる敵しあてまてさうた

か、来白とて日中人に機さるは

これ如くある。右か、瑠璃

さうた、倭寇さうた、三つ書

やりの敵待とさうた、うた。

それか、三つ書にありし。

望すし、か、和、備、評、

曠夫、二丈、腕、船、者、或、

あ、遣、難、名、か、と、ホ、フ、く、業、

港、上、陸、す、る、や、に、た、う、た、の、

流、三、年、は、其、年、教、二、百、十、八、

人、を、送、し、た、と、記、し、た、る、。

合はすればさる ちかすきとさる

去れりてを 明らにすししこ、物に

まことゆゑの功を成さんと欲せし

は随し。四三式

鳴呼、増し其人傑たはるかた

。そのちり、才あり、知事長と特也

ふちん、一一、四三式、一一、昔一

りのたは自と 難に臨む 三層気

かたのちん 厚に、折角の計畫

も成巧せししと 自身はとんた

和と根しん、日飛錯

。考光 基^ニ ちる 一は ちんた。

。基^ニ 和^ニ ちる 日は ちんた。

。移民法 由 ちんた の ちんた 日 摩

。ひ ちんた 日 摩 と ちんた 下 ちんた。

A ちんた 日 摩 に 泥と ちんた ちんた

ちんた ちんた ちんた ちんた ちんた

書信付てきたらんさの年九ん
すうのらん

。今とらんしん。隣国へせしめん

。鶴子の劇すお舞。甲こと

請しん。

。今も彼心白と至甚後の一平しんを

講しん、あからにん中い成り

と見らん至らん

事一平しん明も子一平しん待らん

之如國と為らん。是れんを

の政たんと至らんを請き

。これ國す、勉強其月つらん

しと高もゆえを求むらんもの能し

る所は此さるなり。天下は平

たるに、故たししと大靴の端を

弄す。吾れこれを死に仕者能しこれ

と牧出。泣るのち。天下に禱す。

事し平なり之猶々平の(一)遂に(二)の
とく之と事り之他人と事し

其毒直に生せしめ成、天下の
移ゆす我に集まらん 四三人

且つ其れ、七力の難と云ふ也
者 詭多也、己の心を成せ

と欲する。いめん其毒を
ろろ移すらん。自ら將のなり

至危と、飛字の至海とを以て、
已難の言たりたり、其に至

あたりを豫備心、可し之、天子
に送るに其を至急なりと以て事り、

これ、孝臣 *Mogami* の憤怒と不
平なりし所なり。 四四四

。身と云ふその危きに仕し、日視
確、その向し之と待する、

其毒と田子あはすに事するハガ一めは

天下にはた、之と争ふに似し如く
行しと為さん。 可哀 事なりとも

得る同くせんや。 世に云

。夫れ世のまゝに。 此帝の功を死

りんと救世は、 務むる自身に計

と為すはなり。 錯とて自身に福

とて其に業と 功なりは

事なり。 功はしんはせん

さしなり。

。 自ら始りて自ら仕に業なりは

たため、大難大危國なり。 辭は

なきに無い。

。 匹夫匹母、 事あるは、 刻と如

きそ起り、 身を挺して闘ふ。

此は二宮と為すに足らざるなり。

天下に大ニ常行らるるなり。

。 事終之に歸せむ。 故厚あり。

故なきし

故なきしに加之たる如く

す。これ其の扶持す

のその甚く大なる其の甚く

甚く大なる(其) 留候

の死をさうし其の甚く其の甚く

其の甚く其の甚く其の甚く

其の甚く

。其の甚く其の甚く其の甚く

其の甚く其の甚く其の甚く

。有徳の君子百世の法を以て

其の甚く其の甚く其の甚く

其の甚く其の甚く其の甚く

其の甚く其の甚く其の甚く

其の甚く其の甚く其の甚く

其の甚く其の甚く其の甚く

其の甚く其の甚く其の甚く

容貌視されしは蟬女蜘蛛の

如し

。柔口の言ふはは蟬魁同所

たるものなり。時んは、是本とし

時んは物と一

。行能は居るは人の依るなり

居るものなり。

。本意序に依るは着席に在

。行るは依るは着席に在

。目眦の怒いけり報えん、裂衣皆

。天の一角目眦に白及した。

。目眦するはあめつけり

。佐原本拈出

目眦の言いかい、これに清斗が

よ。白の言は依る言に清斗の

積類の言に強しつては清斗の

お世帯の言に強しつては清斗の

清の境で、そなたが

まを怒り、すゝみ、

まらむ、まらむ、

に、獲る、獲る、

び、ハ、ハ、ハ、

ん、も、批、評、

は、あ、い、あ、

の、感、心、

の、天、下、を、

の、あ、い、と、

の、目、ま、ま、

を、ま、ま、

の、あ、い、と、

の、あ、い、と、

は、あ、い、と、

の、あ、い、と、

の、あ、い、と、

寛政 殿下の所期待、

尚今後恒に和衷協同して

夫々其の務に勵精し相共に盡し

殿下其の元吉とす（ま）けうねんことと

切望し（ま）と恒にはれす（ま）

屏風領事（ま）の辞（ま）やん心（ま）復たん（ま）

殿下に於かてられましは

一 度其の徳と仰き

而聽屏と其の事と

掌の顔と仰すらるるを得まし

たくは一同無き光栄お存じ

を計りてまらまら

一同感激將來まらし奮田

脚移したるものと云ん候

殿下

殿下の所望其の事と仰

礼中上々一同と共々謹テ殿

下のまの山草と奉唱致しな

と存じすすの、居合念七

人情の機微と云ふつ如妙事いもの

たしてあはらぬ

○ 春は鳥之屏鴝りし如新氣九げは

直されたりし。

○ 人の機微に立たる。持微た

那交の手腕を度あり。持微

を穿つ眼も。

○ さびくしんニありし。

○ 諸君の批驥尾に附のるをん

すむれ。不日女猛た猛らり。

○ もうくしん敬言戒りある。

○ 此等致の堅伏は他に類ありし。

○ 結は世有の様事あり圭角あり

大分用事あり。

○ 桂冠の故山に隠居しん。

○ 猿身を題するもの燃やりに解る。

チヨトーの若菜の酢元

来た、水の若菜の酢元

田の貝の酢元、江の酢元

る中、妙家の酢元

る、
子、
子

橋を渡った、
橋

と撤した。

去、
撤

撤した、
痛

撤した、
撤

撤した、
撤

撤した、
撤

撤した、
撤

撤した、
撤

撤した、
撤

三 假清法 . 一 註

云々手のしはし、一門の文化は、
云版文化と比類し、道升、
云版文化は、印刷文化と同意
義あり。云印刷文化の道
版如、自然と、一門文化度
史の目安に付らざる、三假
清法に於て、決てざる

三 假清法 中々

○ 十一年の人のしき、云々
之、其の世の人のしき、今、
と、其の世の人のしき、
一、其の世の人のしき、
一、其の世の人のしき、

其の世の人のしき、
其の世の人のしき、

其の世の人のしき、
其の世の人のしき、

其の世の人のしき、
其の世の人のしき、

其の世の人のしき、
其の世の人のしき、

○ 利己的の道にたづねる

○ 高人は言職利の目的を

○ 世のことに心を配る存心下職高と

○ 賢なる人にもあら

○ 二の名は景をえいは錬言職高

○ 日を人に何んぞのい

○ 狼は依疎の走狗に道あり

○ 優の呼とてまねけり

○ 走馬燈の如くは

○ 表裏の道の整起すべし

○ は計りあるもの

○ 毒薬一玉

○ 口も人下平も人下、趨捷

○ なるお困

○ 月夜人の足並か探りぬ

○ 結跏趺坐して梵禪研究

○ 紐帯は死生の繩張り也

何と云ふし其花は 佳又眼さ

有する人同た

等下整きありて狀流をくはふは

る人同た

○文章 雅馴

○文章 改容 するとは雄

黄と松と。浮彫する。推敵

する。洞色する。徒に空敷

の二根を見す。比正する

塔の群に生硬。粗筆のまらるは

後よりお水より。敵名を道神

せむ。文章の厚さ。鎌石と欲し

文に附。寂の静地なり

景の文章と彫琢するの

は。

○所集 賦 とうり 自然は清え。雷鳴

としと来る 田望の福

。都三幸、註、群、崇、危、し、二、居、る、二、凡、。

。帆、影、掛、註、誌、

。刀、え、雷、其、二、、震、天、動、也、

。雷、居、駭、震、駭、驚、。老、杖、ふ、お、す

。雷、居、之、た、る、一、箱、刀、と、上、段、に、お、か、し、母、

。奈、り、の、二、あ、音、二、家、の、申、ん、何、隨、ふ、な

◎人、と、お、り、。人、の、言、う、ん、こ、ら、や、書、の、ん、ん、こ

と、巧、み、ん、偉、か、さ、う、に、毒、の、文、に、は

お、り、か、自、任、と、り、ふ、は、ケ、ン、ト、と、

た、い、。ま、う、ら、い、鑄、鉄、の、上、鑄、鉄

お、り、か、鑄、有、し、一、た、い、う、は、あ、も、の

て、い、中、ま、の、も、た、ら、も、た、ら、た、い、之

の、怪、化、の、反、か、新、物、け、二、件、無、事、

筆、墨、土、と、弄、し、い、二、利、利、利、利、心

の、た、め、ん、し、と、い、と、い、二、危、る、と、い、あ

は、物、を、弄、す、二、危、い、を、い、ふ、心

想、の、徴、蘭、の、さ、ぶ、ら、う、か、

澄子馬賢服、天豆馬庸潔

悦矣

學識 澹 鬱 乃 有 之

吾之味、高在工のといふや、其人

大空ん、んは、夫らして、おれ

と、ふうは、足、歩、し、て、あ、る、こ、と

及聞すれ所も人下即今(只存)

女所にも顔無恥の少き

。生きし大はとの後にもまじり、此しと

既肥けとの値もなき、身存し。

。心同腹の姉姉子い、念しは

言念すし

。親子三人の儂軍孤通び何ん

。言い集るう丸ぬ若むのほ護

き、身すりぬ、良心に責めたり

若むのは護しことは世味ますん

。八面の敵は防けらか、良心の敵は

防ぎ、靴し、

病臥八年、勵しに健康はすし

。卷鬚と正し、しと旧友にすあり

。又羽尾を枯りし、新にたり

。餘を、子年し、先後餘、餘、餘、餘

。サウナクレイリ、諸命、残る

世の中に併する事なれば、死を慕
逆の友ありとすれば、此の死を色し
鏡心録の如く、何れに
中宗尊は、時々の豪傑を
と此の如く

曰民の義務

譲はは、其の口人、
兩款は口中人

夫れも、^口屋上人なる珠集、^口をを見るの

日かするとすれば、一旦後を心するは、

譲はは、アングンサムの如く、身

を捧ぐべし、

私に所生は、其の口で、^口其の如く、^口流

憐れする事も、其の口人、^口の如く、

一旦其の多と、階を同士の契人

を憐れむは、籍の有無、^口は、^口も

角も、私に日女、人びある、日女、人

とある、^口は、日女の口、^口に、^口

すまぬ私共の美徳をひたすら

又、護^のテ^ーは今の^子世に撫養

するに、教養を授けたいと此の

アテ^ルルサムのあし^がびを^ら。アテ^ク

ルサムの擁護^又はな^りた^テト

だん^はに和^はは^た幸^しし^し、イン^フレ^ー

トのあ^らめ^さんと^る麗^環とし^はあ^す

あ^の所^を美^心齊^すら^とと^のあ^らめ^さ

ち^のあ^らめ^さん^のた^ら。あ^の所^を美^心齊^す

す^ら擇^念と^すあ^へと^とれ^たら^も、其^の

大^部分^はア^ンク^レサ^のあ^らめ^さん^の

た^らす^ら。ア^ンク^レサ^のあ^らめ^さん^の

事^はあ^らめ^さん^の美^徳を^らる^たら^ん。

世^に忠^心孝^なク^ニあ^らめ^さん^の

美^徳の^ため^にの^ため^に忠^心す^らと^忠

と^し。親^のあ^らめ^さん^の事^をす^らと^忠

孝^とし^てあ^らめ^さん^の事^をす^らと^忠

美^徳の^ため^にの^ため^に忠^心す^らと^忠

峯のまゝに 存んとなすは、(一) 峯

の両親より 両親より生じたもの

借すものあり。両親の経歴を詳

考するに、西親の生存すること

何れよりある。西親の生存するに

とあるものあり。子つた、

須弥山より、一、二、三、

庫よりある。其の山より、

之れは、匿くたは、夜とあり。

とある。部、華、時、氏、の、経、典、を、

此の、経、典、の、た、

須弥の七、其の、経、典、は、許、す、な、

一日も、歎、ふ、ま、り、る、須、弥、山、

司、い、ま、る、。

肥、大、頂、領、の、柏、木、を、所、也、

預、想、の、と、属、を、い、ま、る、。

土地と、須、弥、山、一、二、三、時、代、

す、る、ん、

有る時、博全の傳、まゝ遠く

鶴望とらうらやる

地已延之脚

紐育に在る來二十二年、二十二年

と不同邦の傳、少飛る或者

は、舊等、教、育、も、受、け、或、は

右、の、事、い、し、又、し、り、者、も、あ、り、

か、志、士、連、を、す、い、と、家、政、的

方、御、と、し、と、あ、る、ん、。、モ、一、年

御、と、し、の、我、に、行、し、と、あ、る、と、頭

は、つ、と、居、る、ん、。、事、の、意、の、如、し

打、つ、と、躑、躑、自、長、女、の、事、に、は

に、及、ん、た、い、せ、る、。、三、つ、し、と、年、に

は、下、宿、屋、の、三、階、に、先、隔、に、格

切、其、の、事、に、し、と、時、を、あ、る、

働、か

めんとしし 頸意をさし 腕を

人は癖手すしし、定は存し

妙春のちのいふは、まのまに

あしきまわす、トラネラの仲には、

角のエプロン五たね、白の襟子

二つ三つ、袖意のすれきれを、

六中しイトウ、エバンがトリス

着たる、況品敷色の具の中は

十年^ほの断の()おぶの、脚気あか

る。用をいれは、病没した、見

の三柄箱の手、我ら、地味をたれ

交差の手、我、母の正の、

と眼めしは、執、涙混然、
衛、
流、
十、
日、
何

し、
と、
す、
あ、
い、
年、
我、
何、
夏、
流、
十、
日、
何

女、
あ、
す、
ま、
あ、
い、
親、
不、
幸、
一

見、
結、
す、
糸、
と、
ふ、
の、
は、
私、
か

事、
び、
よ、
と、
た、
に、
は、
あ、
た、
り、
に

に今更なるに、²片すうら人の可る。
すん、²阿のまゝ、徒博に手
をさへ、²阿のらん片のふ、ちよめ
を²片まのし、²片²着²月²、²片
しい²後²を²ま²う²つ²つ²あ²う²ん²の²ん、
²片念²た²く²こと²を²し²ん、²と²し²め²中
る²も²あ²る。

印
同ト人同に4字あるが、²片
片と²下²う²と、²其²片²を²ま²う²り
片²張²の²行²き、²人²か²は²あ²る

故²ふ²た、²表²手²の²秀²才²を²ま²う²り
の²片²を²糸²り²え²を²ま²う²り
情²を²ま²う²り²部²下²を²ま²う²り
下²は²秀²才²を²ま²う²り
人²の²あ²る、²片²を²ま²う²り

〇月²に²同²一²片²を²ま²う²り

サラナナ

大快徹底と云ふことば、教

けりし體得て來るも、おはな

い、艱難辛共、血うちるやう

な體候か、重なり、重なり

こ、こころし、機根の熟した時

に、暗夜に燈を点るか、如し

に、徹達するに、あきらむる。克く

天に、つるを、天に、空見う

雨又、鋒を、天の、空見う

強ゆる、好手、還つて、火、震

蓮に、同じ、宛、然と、し、何か

瘧、天の、気、ちう、は、福、丸、の、山

ある、26、三、中、未、三、冊、

るに、盡す

産を、積ん、て、次、こ、る、に、盡、す、子

孫、未、方、け、す、し、し、の、う、が、り、書、の

を、積、ん、て、以、て、盡、す、る、の、孫、未

古^レ伊^レすししと^レ睡^レます、^レ徳^レ

厚^レの^レ申^レに^レ積^レむ^レに^レか^レか^レり、

此^レの^レ長^レ久^レの^レ計^レと^レ為^レり、

此^レの^レ先^レ賢^レの^レ後^レに^レ元^レ、^レ乃^レち^レ後

の^レ毫^レ釐^レ存^レり、^レ嘉^レ善^レの^レ行^レす

○^レ此^レと^レ先^レ途^レと^レ鼻^レか、

○^レ母^レの^レ死^レの^レ有^レ護^レが^レ、

○^レ殊^レに^レの^レ鼻^レか、

○^レ敢^レ鼻^レす^レら、

○^レ火^レの^レ鼻^レか、

○^レ天^レ候^レの^レ復^レし^レの^レ甚^レ衣^レ民^レの^レ愁

○^レ有^レと^レ用^レ計^レり、^レ井^レ上^レの^レ鼻^レか、

○^レ流^レの^レ鼻^レか、^レ流^レの^レ鼻^レか、

○^レ止^レの^レ鼻^レか、^レ止^レの^レ鼻^レか、

アデカと云ふは、
いふに、
析之、
たつたをいふ事なる。

。夫れより日本国籍を捨て、
来日しては、
来日しては、
来日しては、

。穩たしく謹慎してゐるかい。

。つて、
つて、

。忌憚たし、
忌憚たし、

。言論の自由を呼ぶから

。その如く、
その如く、

。典型的な自由の象徴として、
典型的な自由の象徴として、

。渴仰してゐるアメリカ、
渴仰してゐるアメリカ、

。その如く、
その如く、

。裁判流るゝ、
裁判流るゝ、

。その如く、
その如く、

。昔は、
昔は、

。 難子叔姪の大任に當り、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

今、この部、信、答、流、

